

緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

黄土高原と日本のあいだで	P 3
神頭山が見下ろす村で	P 4
春の二風谷に行ってきました!	P 6



大同周辺は人口が多く、1人あたりの耕地面積が少ないため、浸食谷の底まで耕す。(撮影：橋本紘二)

GENに参加するには

- ☆会員・会報購読者になる
- ☆自然と親しむ会・講演会・報告会・学習会に参加する
- ☆ワーキングツアーに参加する
- ☆ビデオ『黄土高原に緑を!』を見る
- ☆使用済みテレカ・オレカを集めて送る
- ☆KDD グリーンアースダイヤルに登録する etc.

あなたのご参加を待っています!

1997・7

56

総集編

GENのこの1年

～こんなことをしてきました

昨年の会報「総集編」発行から1年。いろいろなことがありました。アイヌ新法が成立し、NPO 法案は継続審議になり、地球温暖化防止のための具体的な計画はなかなか煮つまりません。ナホトカ号の重油流出事故から半年、今度は東京湾で原油流出事故……。GENのこの1年を振り返ってみました。

【1996年】

- 6月・自然と親しむ会「武庫川と廃線跡の自然」(石原忠一さん、25名)
- ・川西市国際交流協会で、黄土高原の緑化協力について講演
- 7月・黄土高原へワーキングツアーを派遣(23名)、植物標本つくりにもとりくむ
- ・チコロナイ学習会「アイヌ料理に挑戦」
- 8月・チコロナイ部会が、北海道二風谷で、こどもキャンプ(15名)
- ・チコロナイ部会が、北海道二風谷へワーキングツアー(12名)
- ・高松市日中友好協会主催の中国問題講演会で黄土高原緑化協力について講演(100名)
- 9月・講演会「沙漠化地域の環境と生活」(小川房人・植田勲さん、60名)
- ・チコロナイ学習会「ワーキングツアーなどの報告会」
- ・ゆうりん会で黄土高原緑化協力について報告
- 10月・絵はがき「黄土高原の四季

- (春・夏)」(橋本紘二撮影)を発行
- ・写真パネル「黄土高原の四季」(橋本紘二撮影)を作成、展示会を開始
- ・黄土高原へ緑化考察団を派遣(6名)
- ・ワンワールドフェスティバルに参加
- ・チコロナイ部会講演会「自分史を語る」(青木悦子さん)
- ・大同で地球環境林建設会議を開催(96年度事業の点検と97年度事業の計画立案)
- ・大同で地球環境林センターの温室・ビニールハウスなどに着工
- 11月・全ジャスコ労働組合がジャスコ店舗で黄土高原緑化協力のパネル展示、全国で継続
- ・京都外大・神戸大・京大の学園祭で黄土高原緑化について講演会とパネル展
- ・自然と親しむ会「比良山で種子あつめ」(25名)
- ・緑の地球ネットワーク第3回会員総会を開催、会則改正、役員改選、97年度予算決定
- ・チコロナイ学習会「チカッパ美恵子

さんと交流」

12月・国際ソロブチミスト奈良で報告会

【1997年】

- 1月・奈良の中学校・高槻の幼稚園などで黄土高原緑化について報告
- ・チコロナイ学習会「97年の学習計画」
- 2月・講演会「沙漠緑化と微生物」(小川眞さん)
- 3月・国連持続可能な開発委員会(UNCSD)地球環境行動会議(GEO)共催の「地球環境パートナーシップ世界会議」の広報プログラム・シンポジウムで黄土高原緑化協力について報告、パネルの展示
- ・北海道二風谷へチコロナイ部会がワーキングツアーを(8名)派遣。
- ・神戸大学アイセック(12名)が中国スタディツアーの一環としてGEN緑化協力地を訪問。
- ・黄土高原にワーキングツアー(31名)を派遣。
- 4月・全ジャスコ労働組合が黄土高原にワーキングツアー(21名)を派遣。
- 5月・自然と親しむ会「立花先生と新緑の植物園を歩く」(60名)
- ・講演会「北国の森林～そこに生きる動物たち」(有澤浩さん)
- 6月・富士ゼロックス端数倶楽部が黄土高原にボランティアキャンプ(15名)を派遣。
- ・チコロナイ学習会「二風谷ダム裁判の判決を読む」

楽しんだ初夏の1日

植物園を60人で歩く

「立花先生は雨男だからなあ……」との心配はさいわい杞憂におわり、5



立ち止まるたびに新しい発見が……。

月25日、外を歩くにはちょうどいい曇り空のもと、大阪市大理学部附属植物園で自然と親しむ会が開かれました。なんと60人余りの人が参加、そのうえ園内を歩いている内に「なんだか面白い説明が聞ける」と人数が増えていたような気がします。ともあれ、それぞれに初夏の1日を楽しんでいただけたようです。

バナナのおいのする花をつけるオガタマの木。チューリ

ップのような大きな美しい花が咲くユリノキ。メタセコイアの巨木は、日本にやってきた最初の1本。クスノキの緑の濃い葉は、2年目、3年目のもので、空気のきれいなところでしか見られないこと。

この植物園の木たちを、日本中、世界中から集めてこられた立花先生ならではのお話をうかがいながら、すっかりリフレッシュした1日でした。(東川)

富士ゼロックス端数倶楽部 黄土高原で植樹ツアー

6月28日から7月4日まで、富士ゼロックス端数倶楽部のメンバー15人が、

黄土高原と日本のあいだで

王 黎 傑 (緑色地球ネットワーク北京連絡事務所長)



「中国大陸からの黄砂前線はすでに北九州に……」。日本の天気予報でこういう表現がよく使われる。中国の黄土高原と日本との密接な関係がこのことでもわかる。

雨量豊かな日本で生活している人には、黄土高原の情景は想像できないだろう。乾燥した黄色い世界、黄色い山岳の延々としたつながり、土壌浸食で形成された大地の亀裂……この巨大な風景の前で、人間は限りなく小さく見え、長い歴史の重量感が伝わり、「のんびり」という言葉の本当の意味を考えさせられる。中華民族の古い文明がこの土地で誕生したことがこの景色からはとても想像できないくらいだ。

数人の作家が黄土高原で生活体験をしたときの話がある。村を訪れたときちょうど昼食時間になった。彼らは『食前に手を洗う』習慣を守ろうとした。道端にいた7歳ぐらいの子どもに手を洗うところを尋ねると、その子はしばらく考え、やがて半分くらい水の

入った洗面器をかかえて帰ってきた。作家たちが手を洗った水を捨てようとすると、子どもはそれを止めて、洗面器を持って行ってしまった。この水が一家にとってどんなに大事なものであるか、作家たちはやっと悟ったのである。

黄土高原は中華民族の発祥地であり、いまは黄砂の源となっている。環境に国境はない。毎年、黄砂に逆らって、たくさんの日本人が緑化協力のために黄土高原に来られる。70歳をすぎた専門家、学者もいれば、高校生、大学生、会社員、そして家庭の主婦もいる。彼らの願いは、この黄色い大地の緑を再生させることだ。

幸いなことに私もこの活動に参加し、毎年数回、この土地を踏んで、そのたびに新しい感動を感じる。

山西省大同市は、第二次世界大戦にさいし、日本軍により最も深刻な被害をうけたところの一つで、農民たちは日本軍に深い憎しみを抱いているが、



王黎傑さん

昔の日本軍と現在の日本人民とをはっきり区別できる。彼らはドラと太鼓、歌と踊りで緑化に参加する日本の友人を歓迎する。

日本民族の執着精神、黄土高原の景色、農民の純朴さ、どれも私が深い感動を受けることばかりである。

古い書物によると、はるか以前、緑に恵まれていた黄土高原は、文明の発展にともなって森林が消えてしまった。もともと純朴であった人間も、社会の発展にともなって、しだいにそうでなくなってきた。貴重な水を黙って捧げ持ってくる純朴な子どもたちのために、黄土高原に緑を回復するために、私も微力ながら努力したいと思う。

国際ボランティア貯金の配分決まる

郵政省国際ボランティア貯金の配分が決まり、6月27日、大阪港郵便局で交付式が行われました。配分金額は7,153,000円で、大同市南部の山地・丘陵地緑化、小学校付属果樹園建設などに使わせていただきます。

国際ボランティア貯金は、利子の20%がNGOへの寄付金となる制度です。近年の低金利で配分原資の減少が続いていますが、このたび、預金者の希望により寄付金の割合を10%きざみで増やすことができるようになりました。詳しくは郵便局でお尋ねください。

海外ボランティアキャンプで大同を訪問しました。同倶楽部はいままでにもフィリピンなどにボランティアキャンプを派遣しています。詳しくは次号で。

緑化基金にご協力ください!

GENの大同での緑化協力も6年目となり、いままでの協力ポイントも70か所以上を数えます。植えられた苗木が480万本、面積にして1972ha、うまくいっているところ、問題のあるところとさまざまですが、大同市南郊区に建設した“地球環境林センター”では菌根菌をつかった育苗など、新しい試みがはじまっています。また、技術者の研修・交流の場として今後の役割への期待も大きなものがあります。

一方、近年の低金利などで、各種助成金は減少を余儀なくされています。地球環境林センターの建設は3年計画の3年目、あとひといきで緑化協力の拠点が完成しますが、いれものもできても、中身はこれから。みなさんのいっそうのご協力をよろしく願います。なお、会報発送作業の都合上、一律で振替用紙を同封しますが、最近ご協力をいただいた方には重ねてのお願いではありませんのでご了承ください。

文具ありがとうございました

先号で、大同に持参する未使用の文房具を送ってくださいとお願いしたところ、たくさんの方にご協力いただきました。送っていただいたもののほと

んどは協力地の村の小学校にプレゼントしますが、シャープペンなどは、村では芯が切れても入手が不可能ですので、緑色地球ネットワーク大同事務所および地球環境林センターで使わせていただきます。ご協力ありがとうございました。

神頭山が見下ろす村で

上田 信 (立教大学教授・GEN世話人)



神頭山

太陽の光が西に傾くころになると、その家の子どもたちは近所の子を集めて遊びはじめる。その日は「ポーマーチュン、マーチュンカイ、ヨーセイレイ」という童歌を歌いながら、日本のはないちもんめのような遊びをはじめた。ホームステイ先の奥さんが、この歌は「跑馬群、馬群開、要誰来」となるのだと教えてくれた。

私が4日間おじゃました村、天鎮県谷大屯郷韓小屯村は、村の中心に土の岡のようになった明代の要塞がある黄土高原の東北角に位置する村だ。けっして豊かではない。昨年は近年まれにみる豊作で、ジャガイモばかりがやたらにできた。村の広場にはトラックが来て、ジャガイモを買い付ける。秤を

前にして村の者と買い付けの者とが口から泡を飛ばして値段を掛け合っているが、1kgあたり3角(日本円で5円程度)にしかならない。

賀志勇29歳、村の党支部書記、ホームステイ先の家の主人である。賀は、村の産業がジャガイモ一辺倒のままではいけないと考え、村おこしに取り組んだ。しかし、上級の役人は都市の労働者出身であり、村の苦境を理解してくれず、新しい試みにはことなかれ主義をもって対応する。賀は自腹を切って荒れた谷の使用権を国家から買い、村の若い連中とともにレンガ、ポプラ材、アズの生産をもくろんでいる。現場におもむくと、朝早くから30人ほどが分担した役割に取り組んでいる。

荒れた谷に樹木を根づかせることは簡単ではない。羊によって短く刈り取られた草の上には塩の花が咲き、谷の上部のアズの苗木は、通りがかりのロバに樹皮を喰われている。若い連中の持続的な熱意は、この悪条件を変えられるのだろうか。私たち日本のNGOには、何ができるのだろうか。

荒れた谷の斜面を登ると、村を見下

ろすように三角形の山が望める。賀の説明によると、あの山は一つしかないように見えるが、実は二つ頂があるのだという。その昔、この地の貧しさを哀れんだ



賀志勇

兄弟の神が天上から下りてきた。二人は人間界と天上界とをつなぐ梯子になろうと考え、どちらが早く伸びるか競争をした。一日一晩で弟は今の山の高さまで伸びたのだが、兄は遅れをとった。兄が言う。「雨宿りをしていた女が私の頭の上に小便をしたので神力が散じてしまったのだ」と。弟は兄に「ならば、二人で人間界に残り、村の人の役に立つことをしよう」と語り、山になって人びとの生活を見守るようになったのだという。山の名前は神頭山。山になった神と、その話を語る賀とが、私の頭の中で一つに重なった。

神頭山が森でおおわれ、馬の群れが山麓の草原で草をはむ。こんな光景を目にすることは、私たちの世代では無理だろう。しかし、賀のような努力が広がり、引き継がれていけば、賀の遠い子孫たちが馬の群れのなかで「ポーマーチュン……」と歌う日も来るだろう。気の長い努力が、いま求められている。

世界の森林と日本の森林 (その10)

立花 吉茂 (緑の地球ネットワーク代表)

●地球の砂漠と砂漠化

地球が砂漠化している、とは最近よく聞く言葉である。少し理屈をこねるようだが、砂漠化とは一体どのような状態を言うのか、またその緑化はなぜ必要なのか、充分議論しておいた方がよいのではないのか、と考える。日本人は、木を植えれば育つと考えがちである。降水量や土壌の不都合で育たないところもあるし、たとえ育っても、一種類の木を植えたために京都の北山のように自然が壊される場合もある。京都の北山は、元来、多数の種類が組

み合わされた自然林であるのに、たった一種類の木を植えたために自然に反する状態になったのである。

もし、草原が自然であるところ(極生相)に木を植えたらどうなるだろうか。失敗してしまうのは論外としても、そこに豊かな森林ができて、ユートピアが実現するだろうか? また、昔から砂漠であったところに木を植えて、どの程度成功するだろうか、あるいは成功して、予期したとおりのすばらしい土地になるだろうか? これをはっきりさせておかないと、木を植える、

という作業は結果がわかるまで半世紀以上かかるのであるから、50年も100年も後になって、しまった、ということにならないか、慎重でなければならない。百年の計をあまり単純に考え、植えれば良いのだ、理屈を言うな、というのは、昔の日本軍人の口癖であったことを思い出す。

●自然の砂漠とは?

数万年または数十万年以前から、人為がなくて、樹林や草原のできなかった荒地を砂漠と呼んでいる。そこは砂地の場合もあれば岩石地帯の場合もある。森林や草原でなくても、そこは自然の生態系が存在する。ごくわずかな草やサボテンのような多肉植物などが散在する場所もある。

UNESCO (1973) (次頁につづく)



関東ブランチこの1年

これからもよろしく!

春耕の風に乗れ、黄砂が日本に大陸の春を告げた昨年の5月、私たちGEN関東ブランチは壮大な展望と巨大な不安(?)を抱えながら、立教大学の小さな会議室を起点として、「はじめの一步」を踏み出しました。それから早1年。多くの方々の参加と協力に支えられ、私たちは無事、2度目の春を迎えることができました。ワーキングツアー以外、なかなかGENの会員の活動に参加できない関東地区の会員に「交流の場」を提供することを第一の目的として始めたこの活動ですが、そのために昨年度中ほぼ月1回のペースで以下のような活動をおこないました。

96年5月 第1回交流会。大阪から高見事務局長出席。

6月 立教大学佐々木研一教授による講演会「地球を変える緑と時間」

7月 夏のワーキングツアー(以下WT) 関東地区参加者事前説明会

8月 夏のWT帰国報告会

9月 池袋にて交流会

10月 立教大学上田信助教授(GEN世話人)による連続講座「緑の中国」開始、第1回「中国古代の森—詩経・楚辞の世界」

11月 「緑の中国」第2回「中国中世の森—志怪・伝奇小説の世界」

12月 「緑の中国」第3回「中国近世の森—トラの眼から見た中国」

97年1月 「緑の中国」第4回「中国現代の森—『古井戸』から読みとれるもの」

2月 春のWT関東地区参加者事前説明会

3月 COP3に向けて・地球温暖化問題を巡る学習会：高見事務局長出席

4月 春のWT参加者による交流会

5月 春のWT報告会。仙台より遠田

宏先生出席。

残念ながら、参加者数が10名を割るイベントもあり、1年を通じて活発に活動できたと言うには無理があるかもしれませんが、最近のイベントではWTに参加した学生を中心に会員の積極的な動きがあり、これを追い風にして今年度はさらに活動を充実させてゆくつもりです。具体的には、自然観察会などフィールド活動の開始(9月頃予定)や、COP3開催をにらんでの関東地区における広報活動の拡充などの予定があります。また、まだ構想の段階ではありますが、東北地区などにおける講演会開催などの可能性も考えています。まだまだ小さな、頼りないサークルではありますが、関東地区在住の会員の方々の気軽なご参加とご教示を心よりお願い申し上げます。(工藤)

関東ブランチに参加して

倉持 幸恵 (大学生)

の発表した世界の植生型によると、荒原と亜荒原地帯を

「疎林帯」低木林、矮小低木林
「草本帯」

「極荒原」岩石極荒原、砂地極荒原に分類している。

吉良(1947)の気候類型と植物社会の類型によると、乾燥気候(B気候)乾湿指数7~5をサバンナ気候、5~3をステップ気候、3~0を砂漠気候としている。

われわれが緑化協力をしている山西省は乾湿指数5以下である。

完全な砂漠地帯でも、オアシスがあったり、川や伏流水が存在したりしているから、局部的には緑は存在する。しかし、全体的に眺めて砂漠地帯には森林がない。ただし、暖かい地域の高い山では、垂直分布でわかるように、蒸発量が減るから、降水量が少なくても、頂上付近を除いて森林ができることがある。

この春のツアーに定員最後の一人ですべり込むことができたご縁でその後も何かとGENにお世話になり、先日は、Macを持って3年目いまだにメールができないとか、携帯とPHSの違いがわからないなどの笑話(実話)をお土産に、大阪へもお邪魔しました。世話人会を見たかったのですが、私大阪に現れたのをみなさん察知してか「こんなに集まらない世話人会は初めてだ」と高見さんがつぶやく会でした。そのおりに東川さんから「関東ブランチについて書いて」と言われ、つい条件反射で「は~い」と返事をしてしまいましたが、実は私もまだ2回しか参加したことがないんです。それも春のツアーの写真交換会と報告会ということで、集まったのは春ツアー参加者の、時間のある若手(?)が多かったように思います。

その友人や以前のツアーに参加した方、ジャスコの皆さんも来てくださ

ましたが、確かに話題の中心は「この春の.....」だったので、ツアーに参加なさらなかった方には楽しんでもらったのかなど、翌日冷静になって反省しました。もちろん「あのときはあだったね、こうだったね」と旅行が終わってから話せる人がいる、話せる場があるということはとても幸せだと思いますし、今回はそれがテーマだったのだからこれでいいと言ってしまえばそれまでなのですが、それでは関東ブランチはいつまでたっても半年周期のところでんであるような気がしてなりません。写真交換会や報告会も大切ですが、「初めて来た人も同じように楽しく何かを得ることができる場」を持ってこそ水土流出型から土壌蓄積型の活動になっていけるのではないのでしょうか。

たくさんの「はじめまして」を「お久しぶりです」に変えることが、関東ブランチの当座の目標だと思います。ちなみに私の目標は、高見さんからいただいた『世間知らず』の称号を一日も早く返還することです。

春の二風谷に行ってきました！

チコロナイ部会

チコロナイの運動が始まってから、夏、秋と現地宿泊研修会をかさね、今年は、念願だった春の山菜採りとアイヌ料理体験のツアーが実現しました。3泊4日で、参加者は8人。今までになく、貝澤さんご家族をはじめ二風谷のおばあちゃんたちといっしょに過ごすことが多く、短い期間だったのにずいぶんうちとけた交流ができました。私たちのツアーにはいつも何かしらハプニングがつきものですが、今回も、期待していたこと、予期しなかったことなど、楽しい体験がいっぱいでした。今後もいろいろな時期に、いろいろなかたちで、現地宿泊研修会を計画したいと思っています。皆さん、ぜひいっしょに楽しみ、また勉強しましょう。

春の二風谷ツアーに参加して

佐藤 奈美子（兵庫県）

5月9日～12日、二風谷へ行ってきました。この時期二風谷は春の真盛り、やわらかく萌えはじめた山肌にはこぶしや桜が満開、庭先には水仙やチューリップが咲いていました。チコロナイの山に入ると足元にはカタクリやニリンソウ、オオバナノエンレイソウがかわいい花をつけていました。白樺も水をどんどん吸い上げて、ちょっと傷つけただけで樹液がポタポタあふれ出し、あわててみんなで指ですくってなめました。ほんのり甘い春の味、春の息吹をもらいました。案内をしてくださった黒川セツさんが、山に入る時、なにかの動物の巣穴や鹿の寝床をみつけた時、姿の悪い木のそばを通った時と、そこここでカムイノミをなさる姿に、私もなんだか木や草の神様（仲間）の中にいるような気がしてきました。

山菜採りは貝澤耕一さんの裏山へ。沢沿いの斜面に青々と芽吹いているのはコゴミ、アズキナ、ギョウジャニンニク、ウド、フキ、ニリンソウーと食べられる草がいっぱい。でもトリカブトもあるので緊張しました。

貝澤さんの家へ戻ると近所のおばあさんたちも集まってくださり、奥さんの美和子さんを中心ににぎやかにアイ

ヌ料理作りをしました。イナキビやアワは木臼に入れて杵でついて粉にすることから。若い人たちのかけ声もはじめは威勢がよかったのですがーとにかく大変な労働でした。私はラタシケブのお手伝い。美和子さんは「自分のラタシケブ作るの初めてなんだ。いつもばあちゃんの手伝いばかりだったから一度自分で作ってみたかったの」と嬉しそうに大きなお鍋をコンロにかけました。シケレペの実の入った豆の煮物みたいでしたが、甘さ、とろみ、シケレペの量などがそれぞれの持ち味らしくイナキビの粉でとろみをつけて練りながら何度も味見をして、とうとう「これでよし」と、美和子さんのラタシケブができ上がりました。とろっと甘くて、シケレペの実をかむとほろ苦い香りが口中に広がって、アワもち、イナキビだんごにつけて食べると最高でした。ニリンソウは鹿肉のオハウ（汁）の青味に、その他の山菜は時間切れのためゆでただけで、ごはんはヒエめしと大御馳走が出来上がりました。上田としさんも到着され、そのうえ、たまたま泊まっていた加納沖さんとアボリジニの女の方も加わってそれは素晴らしいランチタイムとなりました。上田としさんのアイヌ語が聞けると、アイヌ語学習会の成果を発揮する人、アボ

リジニのことを知りたいと英語で話しかける人、こんな身近に沖さんがいてポーッとしている人（前の晩ここで、トンコリのホームコンサートも開かれたのです!!）、何種類もの山菜を神妙に味わっている人、休日返上で同行してくださった若い貝澤太一さんを囲んで嬉しそうなおばあちゃんたちー。みんなとっても幸せでした。

忙しい農作業の合い間の貴重な一日を私たちのためにさいてくださったみなさん、ほんとうにありがとうございました。

濃縮還元二風谷レポート

石原 由理（大阪府）

初夏の大阪から追い風に乗ってたちまちついた北海道は、まだ、早春の風情。満開のこぶしの花と山桜、白樺の新芽が目には初々しい。私にとっては生まれて初めての北海道です。

到着した日の夕方から雨が降り始め、千歳空港から二風谷までは激しい雨のなかのドライブとなりました。何の予備知識もないままにやって来ましたので、期待と不安と、状況を把握しなくては、という焦りがちよつぷり。

次の日も、今にも雨が落ちてきそうな天候だったのですが、黒川セツさんの案内でチコロナイの山に入りました。



木のカムイにイチャルバする黒川セツさん

山に入ってゆくに連れ、別世界に踏み込んでゆく心地よい驚きで次第に気持が高揚してくるのがわかります。



貝澤さん家でアイヌ料理を楽しんだ後

有澤浩さん講演会『北国の森林～そこに生きる生物たち』

5月17日弁天町市民学習センターで、緑の地球ネットワーク主催、同センター協賛のもとで開催されました。50名の参加者が東大演習林の自然と仕事を紹介した映画を見、有澤先生のスライドをまじえたお話に熱心に耳を傾けました。毎年、修学旅行で演習林を訪れ

ているプール学園の高校生たちや先生がたも参加して下さいました。また、自然保護の立場から、大阪の「槇尾川ダムの見直しを求める連絡会」のアピールも受けました。閉会后、有志で先生を囲んでささやかな交流会を持ち、楽しいひとときを過ごしました。

森は美しく清廉で、しかも瑞々しく多様。空気にまでも緑がぎゅっと詰まっているようです。

セツさんには、木にも男と女の区別があることや、道に迷った時にはカツラやナラの木が助けてくれるといったことを教えていただきましたが、セツさんが何度となく立ち止まっては木にイチャルパ（お祈り）をされるので、木々がいっそう身近に感じられました。賑やかな森がまだここにもあるのです。

山を下りる前に、セツさんに名前を教わった木のなかから各自お気に入り木の名札をつけましたが、私はイノウネニ（ミズキ）を選びました。その美しい木肌をもつ木は、イノウという重要なものをつくる木であると後で知り、感慨深く思いました。

その夜遅くに、「30分だけ」というつもりで、ずいぶん長い二風谷時間の30分、貝澤耕一さんのお宅をお邪魔しました。そこでアボリジニのレオナさんのお話をうかがい、加納沖さんのトンコリ生演奏まで聴かせていただくという幸運に恵まれたことも忘れることができません。木や水や風に宿る命を呼びおこすようなトンコリの調べは、心の底にゆったりと静かに、けれどもしっかりと刻みつけられています。また、レオナさんの、アボリジニのオリジナル・アートと商品化の間に潜む問題の指摘には考えさせられました。

三日目の山菜採りとアイヌ料理作りは、わくわくと楽しいものでした。とりわけ、「エッサオーホイ」と声をかけ合いながらキビやヒエを白でついたことと、ことごと煮込んで作ったラタシケラのシケレペの風味が印象的でした。貝澤美和子さんには、明るい笑顔で何から何まで良くしていただき、初めて訪れた地とは思えない気持ちがありました。

短い北海道滞在でしたが、たくさんの方にお会いでき、見るもの聞くことすべて新鮮で、密度の濃い時間を過ごすことができました。最終日に白老のアイヌ民族博物館で作ったあこがれのムックリ、あの時は音も出せませんでした。今ではそれらしい音が出せるようになりました。エヤイコプンテク（嬉しい）。

夏の二風谷ツアー 募集継続中！

★チコロナイ子どもキャンプ

- 日時：8月5日午後3時～8日午後1時
（現地・二風谷集合、解散）
- 場所：北海道沙流郡平取町二風谷
- 費用：集合から解散まで全費用
（保険料、GENジュニア会員費を含む）3万円
- 募集：小学5年生～中学1年生10人

★二風谷ワーキングツアー

- 日時：8月18日午後3時～23日午前12時（JR富良野駅集合、二風谷解散）
- 場所：北海道沙流郡平取町二風谷、富良野市
- 募集：15人（全行程に参加できる人）
- 費用：集合から解散まで5万円（GEN会報購読料、保険料を含む）
- 有澤先生が全行程に参加して下さることになりました。チコロナイの森にも同行していただき、今後の森林回復の作業の方向なども考えます。

☆両方とも締切りは過ぎましたが、まだ余裕がありますので武田繁典（下記）までお問い合わせ下さい。

チコロナイ通信のお知らせ

チコロナイ関係の現地宿泊研修会、学習会、アイヌ語講座、講演会などの行事予定、ミニニュース、「アイヌ語ひとくちメモ」などを載せた「チコロナイ通信」を毎月発行しています。郵送ご希望の方は郵送料ともども1年間分1,200円を80円切手15枚で同封のうえ、武田繁典までお申し込みください。

チコロナイにさらなるご協力を！

1999年12月10日から、2年計画で始まった第2期計画も、残すところ約半年になりました。

5月30日までで、第1期計画からの繰越金も入れて合計3,480,886円になりました。寄付された方は、第1期も入れて388人です。第1期にご協力いただき、第2期がまだの方は金額はわずかでもけっこうですから、ぜひ続けてご協力をお願いいたします。新たに加わる方ももちろん大歓迎です。

第2期の募金目標を達成するために

チコロナイアイヌ語講座 ～いやでもわかるアイヌ語～ 第3期第2回

- 日時：7月26日（土）14時～16時
- 場所：GEN事務所
- 資料代：第3期（6回）分で2,000円
- 問合せ：平石清隆 TEL. 0745-23-5627
- ★第3期から『エクスプレス・アイヌ語』（中川裕、中本ムツ子著白水社）をテキストに使うことになりました。初めての人もわかるように一から始めます。どうぞ。1回だけの飛び入りも大歓迎です（400円）。
- ★8月は休みで9月は27日の予定です。

第26回

チコロナイ学習会のご案内

先月は「二風谷ダム裁判の判決を読む」と題して行い、20人もの方が参加しました。今月は前々から期待されていた佐藤さんの「語り」を聞くことができます。ぜひどうぞ。

- 日時：7月26日（土）16時～18時
- 場所：GEN事務所
- 内容：アイヌと日本の昔話の「語り」と絵本の紹介
- 語り：佐藤奈美子
- 参加費：100円＋カンパ
- 問い合わせ：武田繁典（下記）
- ★初めての人も、1回だけの飛び入りも大歓迎です。どうぞ。
- ★8月は休み、9月は27日の予定です。



も、チコロナイの輪をますます広めていくためにも、多くの方々の積極的な参加を呼びかけます。

【連絡先】

- 武田繁典
〒546 大阪市東住吉区今川6-2-6
TEL/FAX. 06-704-7720
- 貝澤耕一
〒055-01 北海道沙流郡平取町二風谷31-3
TEL. 01457-2-2088 FAX. 01457-2-3991
郵便振替 00900-2-5202チコロナイ



気候変動と森林

生物多様性JAPAN 第1回フォーラム

- 日時：7月21日（月）13時～17時
（開場12時30分）
- 場所：文京シビックセンター4Fシルバーホール（地下鉄「後楽園」駅）
- 主催：生物多様性JAPAN
- 申込・問合せ：生物多様性JAPAN
TEL. 03-5570-3571 FAX. 03-5570-4515
- 定員：先着150名（会費無料）
- 内容：気候変動が日本や周辺地域の森林生態系に及ぼす影響を考え、未来の植生予測をおこない、問題点を探る。
- 基調講演：森田恒幸氏（国立環境研究所）、熊崎実氏（筑波大学）、高橋邦秀氏（北海道大学）、上田信氏（立教大学）
- パネルディスカッション
「温暖化と森林の未来」
コーディネーター 堂本暁子氏

写真パネル展のお知らせ

ジャスコでの黄土高原写真展のお知らせです。橋本紘二さん撮影の写真パネルが展示されます。お近くの方、ぜひお立ち寄りください。

- 場所：姫路リバーシティーショッピングセンター（姫路市飾磨区細江520、TEL. 0792-31-2200）
- 日程：7月18日～21日

新作ビデオ

『森よ、よみがえれ！』完成！

前作『黄土高原に緑を！』を完成したあとの95年、大同を災害が襲いました。春の干ばつ、夏の大雨はいずれも数十年～百年なかったと言われた規模でした。そして、秋の早霜。

なぜ、黄土高原なのか。黄土高原の緑化に、どんな意味があるのか。ワーキングツアーのようすや、黄土高原に生きる農民のインタビューをまじえたこのビデオをとおして、考えてみてく

ださい。

- ビデオ『森よ、よみがえれ！』（VHS・カラー・28分）
- 価格：5,000円（GEN 会員価格4,000円・送料別途）
- 環境事業団地球環境基金製作協力／文部省選定／環境庁推薦／林野庁推薦／中華人民共和国駐日本国大使館推薦／大阪府教育委員会推選
- 申し込み：GEN 事務所まで
※発送に1週間～10日程かかる場合があります。ご了承ください。

絵はがき『黄土高原の四季』ご利用ください

暑中見舞いの季節がやってきました。絵はがき『黄土高原の四季』で友人に近況を知らせ、ついでにGENのアピールも、というのはいかががでしょう。

- 絵はがき『中国・黄土高原』春・夏の2種類・1セット8枚
- 撮影：橋本紘二
- 価格：1セット700円（送料別・6セット以上の場合＝1セット600円、20セット以上の場合＝1セット500円）